

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 7 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780514

研究課題名(和文) 大学大衆化時代におけるアカデミック・プロフェッションのあり方に関する研究

研究課題名(英文) Study on the Academic Profession in University Popularization Era

研究代表者

葛城 浩一 (KUZUKI, KOICHI)

香川大学・大学教育基盤センター・准教授

研究者番号：40423363

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：ボーダーフリー大学に所属する教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにするための基礎的な分析として、教育と研究の両立というアカデミック・プロフェッションの理念に疑問を呈している教員の特徴について明らかにした。また、教育の質保証という観点から、ボーダーフリー大学におけるアカデミック・プロフェッションの使命・役割・機能だけでなく、ボーダーフリー大学自体の使命・役割・機能も問い直した。

研究成果の概要(英文)：This research aims to explore how faculties at low-prestige universities recognize their academic professions, and to clarify characteristics of those faculties who question a philosophy of their academic profession which is to balance teaching with research. In addition, this research questions not only the mission, role and functions of the academic profession in low-prestige universities, but also those of low-prestige universities itself from the point of view of quality assurance.

研究分野：社会科学

キーワード：教育と研究の両立 教育の質保証

1. 研究開始当初の背景

アカデミック・プロフェッションとは、「大学教授職」という専門職を意味する用語である。現在、アカデミック・プロフェッションは大学を取り巻く環境の変化によって、その使命・役割・機能の再構築の問題に直面している。特に研究大学を頂点にした階層の底辺に位置する「ボーダーフリー大学」と呼ばれる大学では、こうした傾向が強くみられる。

なお、本研究では「ボーダーフリー大学」を、「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」と定義する。「ボーダーフリー大学」という用語自体は、そもそも河合塾による大学の格付けにおいて、通常の入学難易度がつけられない大学の意味で用いられている。こうした大学では選抜機能が働かないために、多様な学生、特に基礎学力や学習習慣、学習への動機づけが欠如した学習面での課題を抱える学生への対応に追われることになる。

本来、アカデミック・プロフェッションに期待される主要な役割は「教育」と「研究」である。それにもかかわらず、ボーダーフリー大学では概して「教育」への期待が非常に強いため、「研究」を表立って行うことが憚られる状況にすらある。教員自身が描くアカデミック・プロフェッションに対するイメージと、周囲から期待されるそれとのギャップに苦悩する教員も少なくない。こうした意味において、ボーダーフリー大学はその他の大学に比して、アカデミック・プロフェッションの再構築の問題に絶えず晒されてきたといっても過言ではない。また、よりよい研究環境を得るべく上昇移動を希望しても、「研究」が事実上許されない教員には上昇移動を担保する研究業績をあげることが困難な構造下にあるという意味で、初期キャリア形成の問題も孕んでいる。

このように、ボーダーフリー大学におけるアカデミック・プロフェッションの問題は非常に重要な問題であるが、そこに焦点を当てた研究は、研究代表者を除けば皆無である。そもそも、ボーダーフリー大学自体、これまで研究対象として扱われることはほとんどなかった。これまでの高等教育研究の多くは、難易度の高い基幹大学を中心に行われており、基幹大学以外を対象とする場合も、多様な大学をひとまとめにした分析が行われることが多かったためである。

日本の代表的なアカデミック・プロフェッション研究としては、新堀通也編『大学教授職の総合的研究』(多賀出版、1984)や有本章・江原武一編『大学教授職の国際比較』(玉川大学出版部、1996)、有本章編『変貌する世界の大学教授職』(玉川大学出版部、2011)等が挙げられるが、これらもその例外ではない。なお、「21世紀型アカデミック・プロフェッション構築の国際比較研究」(基盤研究(A))(平成18-21年度)、「21世紀型アカデ

ミック・プロフェッション展開の国際比較研究」(基盤研究(A))(平成22-25年度)といった研究が行われており、研究代表者もこれに参加しているが、有本・江原編(1996)の流れを汲むこうした研究は国際比較の視点が強く、国内の大学の多様性への配慮という視角に乏しい。

そこで、研究代表者は「「ボーダーフリー大学」におけるアカデミック・プロフェッションの再構築に関する研究」(若手研究(B))において、ボーダーフリー大学に所属する教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにするための研究を行ってきた(平成22-24年度)。

この研究は採択時点では、大学教員等へのインタビュー調査を中心に進められる予定であった。しかし幸いにも、研究代表者も参加した先述の共同研究において実施した、アカデミック・プロフェッションに関する全国規模の大規模なアンケート調査のデータを使用する許可が得られた。そのため、インタビュー調査では捉えることのできなかった、ボーダーフリー大学に所属する教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識の相対的な特徴を明らかにすることができた。また、インタビュー調査によって得られた分析枠組みのもと、量的な分析を行うこともできた。

ただ、国際比較の視点が強く、国内の大学の多様性への配慮という視角に乏しいアンケート調査であったため、ふみこんだ分析まで行うことはできなかった。例えば、ボーダーフリー大学に所属する教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにするという研究代表者の問題意識に照らせば、「教育」と「研究」の両立というアカデミック・プロフェッションの理念に疑問を呈している可能性のある、教育に対する関心の高い教員は非常に興味深い存在であった。しかし、そこに焦点を当てた分析を行うことは、使用できる調査項目やサンプル数の確保といった点からも限界があった。

2. 研究の目的

本研究では、研究代表者のこれまでの研究成果をふまえて、アンケート調査を実施することによって、ボーダーフリー大学に所属する教員の中でも、特に教育に対する関心の高い教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識を明らかにする。それを通じて、ボーダーフリー大学におけるアカデミック・プロフェッションの使命・役割・機能を問い直すとともに、ボーダーフリー大学自体の使命・役割・機能も問い直したいと考える。

3. 研究の方法

研究期間内の具体的な研究内容は大きく以下の3点から構成される。

(1) ボーダーフリー大学に関する先行研究 及び基礎的情報の整理

先述のように、ボーダーフリー大学自体、これまで研究対象として扱われることがほとんどなかったため、先行研究はおろか、基礎的情報すら整理されていない状態にあるといつてよい。これまでの研究においても、先行研究の収集とともに基礎的情報の整理を行ってきたが、今後も引き続き行っていく。幸いにも、2011年から教育情報の公表が義務化され、各大学のホームページを通じての基礎的情報の整理が比較的容易になったため、データソースとして積極的に活用する。

(2) ボーダーフリー大学に所属する教員等 へのインタビュー調査

「ボーダーフリー大学」に所属する教員に対しては、これまでの研究においてもインタビュー調査を行ってきたが、(3)に示すアンケート調査を設計するという視点から、予備調査的に引き続き行っていく。また、アカデミック・プロフェッションやボーダーフリー大学に関する研究を行っている有識者にもインタビュー調査を行い、アンケート調査を設計する上での示唆を得る。

(3) ボーダーフリー大学に所属する教員へ のアンケート調査

インタビュー調査の結果をふまえ、ボーダーフリー大学に所属する教員へのアンケート調査を実施する。特に教育に対する関心の高い教員のアカデミック・プロフェッションに対する認識がどのようなものであるのかという問題意識に基づき、これまでのアンケート調査では不十分であった視点や、(2)で得られた知見を考慮した上で、アンケート調査を設計し、実施する。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

教育に対する関心の高い教員の特徴

まず、ボーダーフリー大学に所属する教員へのアンケート調査に先立ち、研究代表者も参加した先述の共同研究において実施した、アカデミック・プロフェッションに関する全国規模の大規模なアンケート調査のデータを用いて、ボーダーフリー大学に所属する教育志向の教員、なかでも若手教員に焦点を当て、研究を重視する時期にあると考えられる若手のうちから、自らを教育志向であると考えている教員の特徴について明らかにした(雑誌論文)。

分析の結果得られた知見は、我々が教育志向の若手教員(ボーダーフリー大学に限らない)に対して漠然と抱いていたイメージを裏づけるものであった。すなわち、教育志向の若手教員は、研究能力が低く、研究の動機づけも弱いから、自らを教育志向と称さざるをえないのだ、というイメージである。サンプ

ル数が十分でないこともあって、必ずしも統計的な有意性に依拠した知見でないことには留意しなければならないが、少なくともそのイメージを裏切る結果ではなかった。

さて、ここでいう「教育志向の教員」とは、「あなたご自身の関心は主として教育あるいは研究のどちらにありますか。」という問いに対して、「主として教育」、「両方にあるが、どちらかといえば教育」、「両方にあるが、どちらかといえば研究」、「主として研究」の4つの選択肢のうちから、「主として教育」、「両方にあるが、どちらかといえば教育」を選択した教員のことである。こうした問いの枠組みは、教育と研究とを葛藤として捉え、教育か研究かという二項対立で捉えるものであるとの理由から、その妥当性を疑問視する指摘も少なくない。こうした指摘をふまえれば、二項対立的な枠組みで尋ねるだけでなく、教育・研究それぞれに対する関心の高さも尋ねた方が望ましい。

そこで、ボーダーフリー大学に所属する教員へのアンケート調査にそうした問いを設け、それを用いた分析によって、二項対立的な枠組みでは十分明らかにしてこられなかった「教育志向の教員」及び「教育志向の若手教員」の特徴について明らかにした(雑誌論文)。

分析の結果得られた知見からは、先述のような、我々が教育志向の教員に対して漠然と抱いているイメージは、「教育志向の教員」及び「教育志向の若手教員」に(ほぼ)相当するタイプの教員に共通するものでは必ずしもないことが確認された。すなわち、こうしたイメージをもっとも強く体現していたのは、教育に対する関心は高いが研究に対する関心は低い(教育偏重)タイプの教員であることが確認された。

アカデミック・プロフェッションの理念 に疑問を呈している教員の特徴

本研究で教育に対する関心の高い教員に着目したのは、彼らは教育と研究の両立というアカデミック・プロフェッションの理念に疑問を呈している可能性があると考えたからである。しかし、そうした理念に疑問を呈している教員は、教育に対する関心の高い教員だけとは限らない。そこで、そうした理念に疑問を呈している教員の特徴についても明らかにした(雑誌論文)。

分析の結果得られた知見からは、そうした理念に疑問を呈している教員には以下のような特徴があることが確認された。すなわち、労働時間に占める研究の割合が低い者、ボーダーフリー大学で特に求められる教育活動を行っていない者、自身の研究活動が教育活動に役立っているとは思わない者、研究活動に対する意識や研究活動の生産性が低い者、教育・研究活動等に満足していない者や教育と研究の両立が困難だと感じている者、といった特徴である。しかし、こうした特徴は教

育偏重、研究偏重、いずれのタイプの教員にも共通して当てはまるわけではないことも確認された。

教育の質保証という観点からの分析

本研究では、ボーダーフリー大学におけるアカデミック・プロフェッションの使命・役割・機能だけでなく、ボーダーフリー大学自体の使命・役割・機能も問い直したいと考えていた。そこで、教育の質保証という観点から、それに資すると考えられる分析を行った。

まず、ボーダーフリー大学に所属する教員が教育の質保証に対してどのような意識を有しているのか、また、教育の質保証を実現するための取組によってさらに困難になると考えられる研究活動に対してはどのような意識を有しているのか、といった点について明らかにした（雑誌論文）。

分析の結果得られた知見からは、ボーダーフリー大学に所属する教員の半数は、基礎的な教養・知識・技能の修得をもっとも主要な教育目標と考えていることが確認された。ただその具体的なイメージは、「大学」として保証すべきことなのかと疑問を持たれるほどのものであることも確認された。また、それを「大学」として保証することが、「大学とは何か」という根源的な問いに抵触するのであれば、明確に種別化・機能分化がなされた方がよいという考え方もあるが、これを肯定的に捉えるボーダーフリー大学に所属する教員は半数に留まることも確認された。さらに、教育の質保証を実現するための取組により、ボーダーフリー大学に所属する教員の教育の比重がさらに増加することで、その研究活動はさらに困難になると予想されるが、それは当該大学の教育の質保証にマイナスに働く可能性を示唆する結果が得られた。

また、ボーダーフリー大学における教育の質保証に真剣に取り組もうと考えるのであれば、研究活動に対する期待・支援のあり方については検討しておく必要があると考え、ボーダーフリー大学の当該大学教員への研究活動に対する期待・支援が彼らの教育・研究活動にどのような影響を与えているのかについて明らかにした（雑誌論文）。

分析の結果得られた知見からは、研究活動に対する期待が教育活動はおろか、研究活動にも有意な影響を与えておらず、特に研究活動には有意ではないものの負の影響を与えていることから、研究活動に対する支援を伴わない研究活動に対する期待など、ボーダーフリー大学に所属する教員をいたずらに疲弊させかねないということが確認された。また、特に社会科学系においては、研究活動に対する支援が教育活動に有意な「負の」影響を与えていることから、研究活動に対する支援が、ボーダーフリー大学における教育の質保証を妨げる可能性があるということが確認された。

ボーダーフリー大学に関する基礎的情報の整理

本研究では、ボーダーフリー大学については基礎的情報すら十分に整理されていない状態にあることから、基礎的情報の整理を行いたいと考えていた。

そこで、朝日新聞出版『大学ランキング』に基づく定員充足率や偏差値を手がかりとして、ボーダーフリー大学及びそこに所属する学生や教員の量的規模に関する基礎的情報について明らかにした（雑誌論文）。

特に定員充足率については、定員充足率100%未満の学部は300学部を大きく超えており、これは日本の大学の総学部数（昼間のみ）の15%以上を占めていることが確認された。また、そこに所属する学生は20万人を、教員は1万人を超えており、これは日本の大学の総学生数（昼間のみ）/総教員数（学部）に所属する教員のみ）の約1割を占めていることが確認された。

(2) 今後の展望

本研究では、ボーダーフリー大学におけるアカデミック・プロフェッションの使命・役割・機能だけでなく、ボーダーフリー大学自体の使命・役割・機能も問い直したいと考えていた。そこで、教育の質保証という観点から、それに資すると考えられる分析を行った。これによって、ボーダーフリー大学に所属する教員の教育の質保証に対する意識・実態の一端を明らかにすることはできた。しかし、本調査は教育の質保証に対する意識・実態を明らかにすることを主目的とした調査ではなかったため、その知見はボーダーフリー大学における教育の質保証のための実践的な施策に寄与しうるものでは必ずしもなかった。

今後は、これまでの研究成果をふまえた上で、教育の質保証に対する意識・実態を明らかにすることを主目的とした調査を実施し、ボーダーフリー大学における教育の質保証のための実践的な施策を提示できればと考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計10件）

葛城浩一、「ボーダーフリー大学における研究活動に対する期待と支援 - 教員の教育・研究活動に与える影響に着目して - 」大学教育学会編『大学教育学会誌』、査読あり、第38巻第1号、2016年、近刊。

葛城浩一、「教育と研究の両立という大学教授職の理念に疑問を呈している教員とは - ボーダーフリー大学に着目して - 」広島大学高等教育研究開発センター編『大学論集』、査読あり、第48集、2016年、161 - 176頁。

葛城浩一、「ボーダーフリー大学における
学士課程教育の質保証 - 当該大学教員の
意識に着目して - 」神戸大学大学教育推
進機構編『大学教育研究』、査読あり、第
24号、2016年、53 - 66頁。

葛城浩一・宇田響、「ボーダーフリー大学
に関する基礎的情報の整理」香川大学大
学教育基盤センター編『香川大学教育研
究』、査読なし、第13号、2016年、91 -
103頁。

葛城浩一、「ボーダーフリー大学における
教育理念に基づく教育改革 - 学習習慣や
学習レディネスの獲得に着目して - 」く
らしき作陽大学・作陽音楽短期大学高等
教育研究センター編『KSU 高等教育研究』、
査読なし、第5号、2016年、近刊。

葛城浩一、「教育志向の教員」の再検討
(2) - ボーダーフリー大学の若手教員に
着目して - 」くらしき作陽大学・作陽音
楽短期大学高等教育研究センター編『KSU
高等教育研究』、査読なし、第5号、2016
年、近刊。

葛城浩一、「教育志向の教員」の再検討
- ボーダーフリー大学教員に着目して
- 」広島大学高等教育研究開発センター
編『大学論集』、査読あり、第47集、2015
年、89 - 104頁。

葛城浩一、「ボーダーフリー大学教員の大学
教授職に対する認識(5) - 先行研究で
得られた知見との比較を中心に - 」香川
大学大学教育基盤センター編『香川大学
教育研究』、査読なし、第12号、2015年、
91 - 103頁。

葛城浩一、「ボーダーフリー大学教員の大学
教授職に対する認識(4) - 教育志向の
教員に着目して - 」広島大学高等教育研
究開発センター編『大学論集』、査読あり、
第45集、2014年、127 - 142頁。

葛城浩一、「ボーダーフリー大学における
学士課程教育の質保証(2) - 出口管理の
強化による質保証に対する賛否に着目し
て - 」くらしき作陽大学・作陽音楽短期
大学高等教育研究センター編『KSU 高等
教育研究』第3号、2014年、33 - 44頁。

〔学会発表〕(計5件)

葛城浩一、「ボーダーフリー大学における
研究活動に対する期待と支援 - 教員の教
育・研究活動に与える影響に着目して - 」
日本教育社会学会第67回大会、2015年9
月9日、駒澤大学(東京都・世田谷区)。

葛城浩一、「教育と研究の両立という大学
教授職の理念に疑問を呈している教員と
は - ボーダーフリー大学に着目して - 」
日本高等教育学会第18回大会、2015年6
月28日、早稲田大学(東京都・新宿区)。

葛城浩一、「ボーダーフリー大学における
学士課程教育の質保証 - ボーダーフリー
大学教員の意識に着目して - 」日本教育
社会学会第66回大会、2014年9月14日、

松山大学(愛媛県・松山市)。

葛城浩一、「ボーダーフリー大学教員の大学
教授職に対する認識 - 「教育志向の教
員」の再検討 - 」日本高等教育学会第17
回大会、2014年6月28日、大阪大学(大
阪府・豊中市)。

葛城浩一、「ボーダーフリー大学教員の大学
教授職に対する認識 - 教育志向の教員
に着目して - 」日本高等教育学会第16回
大会、2013年5月25日、広島大学(広
島県・東広島市)。

〔図書〕(計1件)

葛城浩一、「ボーダーフリー大学生が学習
面で抱えている問題 - 実態と克服の途
- 」、居神浩編『ノンエリートのためのキ
ャリア教育論 - 適応と抵抗そして承認と
参加 - 』法律文化社、2015年、29 - 49頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

葛城 浩一(KUZUKI KOICHI)

香川大学・大学教育基盤センター・准教授
研究者番号: 40423363

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし